

ピルスツキイ、ブランスラーフ・オーシパヴィチ

Пилсудский, Бронислав Осипович.

サハリン島の原住民 (『生きている古代』 第Ⅱ・Ⅲ 合併号 (70・71 冊) サンクトペテルブルグ、帝室ロシア地理学協会民族誌学部門 1909年 3~16 ページ)

Аборигены о. Сахалина. Живая старина. Выпуск II-III. Книга 70-71. СПб, 1909. сс. 3-16.

Пилсудский, Б.О. Латышев, В.М. (ред.) Аборигены Сахалина. Южно-Сахалинск: Сахалинское отделение советского фонда культуры, 1991. сс. 75-99, 104-108.

解題

ブロニスワフ・ピウスツキ (1866~1918) はサハリン島の先住諸民族の研究者としてあまりにも有名である (ピウスツキ (井上訳編) 2018 など)。1905年、ポーランド独立運動に参加するためサハリンを離れた彼は、本文中にもあるようにアムール川沿いを経てウラジオストクに滞在したのち、日露戦争終結後に日本・米国を経由して1906年秋にオーストリア領のポーランド人居地域に移った。サハリンの先史時代をテーマとしたこの論文はこの時期に執筆されたものであり、先住の異民族「トンチ」に関する樺太アイヌの伝承を詳しく紹介していることで知られる。1909年にロシア語とドイツ語の論文がそれぞれサンクトペテルブルクとブラウンシュヴァイクで刊行された。ドイツ語版論文の和訳はこれまでに鳥居龍蔵と和田完により公表され、特に鳥居のそれは既に1世紀以上も前に発表されている。なお昭和に入って、樺太日々新聞の主筆であった藤井尚治 (1939a・b) が改めて独文版論文の内容を紹介している。これは鳥居の和訳によったものではないらしい。

独文ではロシア語版にない情報 (アイヌの犬櫓はニヴフから学んだものであること、千島アイヌの土器製作に関する言及など) が増補されている (ピウスツキ (井上訳編) 2018 の259~281)。しかし、露文版のほうが細部の文脈が明瞭で著者の主張も分かりやすいように思われるので、ソ連文化基金サハリン支部が1991年に刊行した小著作集『サハリンの原住民』に収録されたB.M.ラティシェフ氏による現代表記版を底本として和訳を試み、巻末の校注も翻訳した。原注は脚注の形をとっているがここでは番号を振って校注・訳注と共に文末にまとめた。

この論文が発表されるしばらく前、鳥居は千島アイヌの調査を通じて少なくともアイヌの一部が土器や石器を用い堅穴住居に住んでいた事実を示し (鳥居 1901 など)、こうした石器時代の遺跡・遺物はアイヌとは異なる先住民族のものとする坪井正五郎の主張に疑問を投げかけていた。しばしば、鳥居の調査成果によって坪井の「コロボックル説」が一旦に説得力を失ったもののように理解されているが、しかし実際には1905年の樺太南部領有を契機として、堅穴居住の先住民族そのものである「トンチ」についての伝承やオホーツク文化の遺物が坪井の主張に新たな材料を与えつつあった (坪井 1908a・b など)。坪井との確執によるものか否かはともかく、領有後の人類学教室による樺太調査に自ら参加できなかった鳥居も「トンチ」に関する情報に強い関心を持っており、ピウスツキの独文論文発表の直後に彼がそれを翻訳発表したことは、当事者にとっての「コロボックル論争」は結局1913年の坪井の死まで終息していなかったことを示すもの、と言えるかもしれない (訳注4参照)。

ピウスツキ自身は、日本での論争も紹介しながら、民族誌家としての立場からサハリンの先史住民についての見解を示している。つまりこの石器時代住民はアイヌの先住者であって古代のアイヌではなく、アイヌよりさらに遅れてサハリンに到来したニヴフとは無関係である。アイヌでもニヴフでもないこの民族は、石器を用い堅穴住居に住んでいた人々として中国古代の記録に登場する肅慎氏あるいは挹婁であろう、というのが彼の結論であった。

底本の校訂者ヴラヂスラフ・ミハイラヴィチ・ラティシェフ博士には訳文の公表を御了解いただいた。トゥイモフスカヤ郷土誌博物館のシルギエイ・ヴィチスラヴォヴィチ・ガルブノフ研究員には底本とした現代表記論文の入手やニヴフ語単語の翻訳について御支援いただいた。函館工業高等専門学校の中村和之教授には訳注作成に際して貴重な御教示をいただいた。いずれも深く感謝申し上げます。(西脇対名夫)

坪井正五郎 1908a 「樺太に於ける石器時代人類に関する研究（第二回、完結）」『史学雑誌』第 19 編 12 号 1299-1312

坪井正五郎 1908b 「カラフト石器時代遺跡発見の鳥管骨（承前）」『東京人類学会雑誌』第 264 号 204-211

鳥居龍蔵 1901 「北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑も何種族の残せしもの歟」『同（承前）」『地学雑誌』第 13 卷第 7・8 号 390-396・468-483 ページ

ピウスツキ、プロニスワフ（井上紘一訳編・解説）2018 『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイルタ～』東北アジア研究センター叢書第 63 号 東北大学東北アジア研究センター

藤井尚治 1939a 「トンチと山丹人」『樺太』第 11 卷第 1 号 126-132

藤井尚治 1939b 「樺太に於けるトンチ族」『樺太』第 11 卷第 2 号 88-93

サハリン島には現在も、初めてロシア人が、あるいは日本人がそこを訪れたときから変わらず 3 つの土着の種族、つまりギリヤーク、オラク、及びアイヌが少数住んでいる。が、初めてサハリンを旅したラパーチン^{校注1)}、パリコーフ^{校注2)}などのロシア人はもう一つ未知の、死に絶えたか消え去ったかした種族が存在した痕跡を豊富に発見した。この種族は石の道具しか知らなかったが、土器製作の技術を心得ていた。

アイヌの言葉に由来して、この伝説上の民族は「トンツィ」と呼ばれるようになった。

土小屋の跡やその近くで見つかる石を磨いて作った道具（斧、矢、槍の穂先）、それから焼き物の壺のかけら、時には完全な土器、貝殻や海・陸棲の動物の骨がなお経験ある考古学者の調査を受けずに残っている。

サハリンの原始の住民の問題についてはまだ不明の点ばかり多いので、ここで他の研究者がこの問題についてすでに発言した内容に付け加えて、神秘的種族「トンツィ」に関して自分が集めることのできた伝承という情報を引用し、サハリン島の古代住民に関する私自身の個人的な考えを述べてみたい。

ギリヤークとオラクは、彼ら自身が認めるように、この島の豊かさに誘われてアイヌより後にやって来たのであり、そこで出会ったのはアイヌだけだった。そのため、小さな川沿いや丘の緩斜面に散在する、明らかに人の手で計画的に掘られた「穴」を、これら新来の人々はすでにそこに住んでいた顎鬚を生やしたアイヌたちのものとみなしたのである。ギリヤークはそれを「クギ・ルリクシ」、つまりアイヌの穴、あるいは「クギ・ムロリフ・タフ・トゥリク」、すなわちアイヌの古い家の掘り込みと呼んでいる。一部のギリヤークはこうした穴の中には自分たちの祖先の住居跡もあることを認めている。オラクは私にトンツィの穴を指して「クニ・ガロプツィ・ナンダ」、つまり古いアイヌのすみか、と言った。ではトンツィに関する話とは言えば、私はヌイ湾付近のギリヤークからしか聞いたことがない。この地域のギリヤークの一人は私に次のように語った。「トンツィは山の、山中に湖の幾つかあるあたりに住んでいた。トンツィは非常に女に不自由していたので、海辺に住むアイヌのところからたびたび女を盗んだ。このことが原因になってアイヌはトンツィに激しい戦いを仕掛け、アイヌはこの種族をすっかり滅ぼしてしまった。」

あちこちで見つかる壺のような器の破片について、ギリヤークの間では二通りに言われている。その一つによるとこうした「ミフ・ヴァニ」（土の釜）の破片は大昔のアイヌのものだと言い、もう一つの説では、昔ギリヤークの先祖が、日本人や満州人から鉄の鋳物の釜を入手することをまだ知らぬ時代に、自ら粘土で器を作ったものであろう、と言う。

また石斧やその他のフリント製の石器は、ギリヤークの信じるころでは落雷の時に空から落ちてくるという。

1905 年にニカライーエフスク・ナ・アムーリエを通った際、私は何人か大陸側のギリヤークに会ったが、彼らのところでもやはり石斧のことを雷の斧（「ルイ・トゥフ」）と呼んでいるとのことであった。アムール川沿いに見つかる壺のかけらは中国人の食器の残骸と考えられている。一方地面の窪みも彼らの住む地域で珍しいものではないが、これについては何らのいわれもないか、あるいはこの「トゥリクシ」は彼らの先祖の土小屋の跡であり、ずっと昔の、今日のように満州式の大きな家をまだ作らず、土小屋だけで満足していた時代のものだと考え

られていた。私はマギ村（ニカラージェフスク近郊）のあるギリヤークから、こうした古いギリヤークの堅穴に関する独特の物語を聞いた。それを、ロシア語に堪能な話し手が私に語った言葉のとおり引用しておこう。

「ずっと昔このアムール川沿いにロシア人が悪魔か知らぬものが現われて人々を殺して回った。人々は大変恐れた。連中はバルカス 舢舨とかいう大きな舟に乗ってやってきた。小さな支流だけは入り込めなかった。そこでギリヤークは散りぢりになって小さい川に沿って逃げ、そこに土小屋を建てて一冬かそれ以上もそこで過ごした。それからアムール本流へと戻った。この連中を「キヌイシ [鬼]」^{註1)}と言った。」

また同じニカラージェフスクで偶々出会った3人のギリヤークにトンツィについて尋ねたところ答えて言うには、サハリン、つまりリエル（ギリヤーク語でサハリンのこと）^{註2)}にはツングースやオラクに似た「トジュン」という民族が住んでいる。トジュンの言葉はオラク語に近い。彼らがどこからサハリンに来たかは知られていない、と。この話を確かめ得るような、このトジュンについてのさらに詳しい話を他のギリヤークから聞くことは、残念ながらそれ以上この土地に滞在できなかつたので、結局かなわなかつた。しかし、この「トンツィ」と音の近い名称についてここでは注意せざるを得ない。アイヌ語にはz [ローマ字ではz]の音がなく、アイヌはそれをtt [ts]で置き換える。例えばギリヤーク語の「ウィズィン [主]」は「オツェン」、ロシア語の「ジマー [冬]」は「ツィマー」などと発音される。そしてアイヌにとって語呂の良いようにtt [n]の字を挿入することがよくある。

土小屋の跡である数多くの堅穴に関して、アイヌはこうしたまちまちの証言をすることはない。石器と土器片はいつの時代にかここに住んでいた「トンツィ」のもだとされている。さらにアイヌは自分たちの古い土小屋と、トンツィの住居の跡である掘り込みとを非常にはっきりと区別することができる。トンツィの堅穴は深いがより小さく、これに対してアイヌのものはさほど深くないが比較的大きい。多来加湖^{註3)}周辺の砂丘の上には、断続的に数ヴィルスタにわたって堅穴が連なっており、アイヌはこれをトンツィのものとしている。私はこの掘り込みを10個余り計測して、深さ平均1アルシンと4分の3から2アルシン、方形の堅穴の側面の長さ平均6-7アルシンという値を得た。アイヌの堅穴は深さ1アルシン半を超えることはなかつたが、その周囲は常により大きなものがあつた。

このほかトンツィの堅穴がアイヌの土小屋の跡と異なる点は、後者の場合多くはその背後に様々の大きさの円錐形をした穴が見られることで、これは「トイ・シンブイ」すなわち土の井戸と言ひ、そこから土小屋の屋根を覆う土を採ったものである。アイヌが同じ一つの土小屋に長く住めば、それだけ屋根から流れ去る土も多くなり、それにつれ井戸から掘りだす土も多く、井戸は深くなるのである。そして深さ3アルシン、穴の周囲は25アルシンに達する井戸もある。にもかかわらず、アイヌが自分たちのものと認める土小屋の全てにこうした井戸があるわけではない。私が説明を受けたところでは、誰かが死んだ場合には土小屋はきっぱりと放棄されるのであり、もし小屋を建てた最初の年に死者が出れば、堅穴が大きくても井戸の跡は残らないことになるのである。建築の時は土小屋の掘り方から土が出るので屋根の葺き土はそれで十分である。

とは言え、トンツィの堅穴が多数あるあたりに同様な円錐形の井戸状のものが見られることもある。が、その由来はまた別のものようである。何世代か前、アイヌはトンツィの堅穴を特殊な鷲の猟のために用いていた。彼らは堅穴の中に餌を、たいていは殺して間もない犬の肉を置き、それを藪や莫産で覆って小屋のように作り、その上と側面に開口を設けた。上の穴はおびき寄せられた鷲がこの罠のしかけに入り込むためのもので、側面の穴はもう一つの小屋の中で見張っている人間が、獲物がかかったことを知るためのものであつた。罠をしかけた掘り込みの傍にはこの見張り番のために新しい穴が掘られ、念入りに莫産と草で覆い隠された。よく知られている通り、日本の武家向けの装飾材料として鷲の尾羽をとる仕事はある時期のサハリンでは大きな産業となつたことがあり、上記のような鷲の見張り用の穴を掘ることがアイヌにとって大いに必要であつた模様である。

アイヌがトンツィの堅穴の中に自分の土小屋を建てることは決してなかつたが、それに隣接して建てることがないわけではなかつた。トンツィは異族であつてその遺跡に配慮する必要があるとは考えられていなかった。自分たちの家の跡については話が別であつた。アイヌが土小屋の中で死んだ者を埋葬せずに小屋の中に放置したうえ、その小屋をその後全く放棄する、ということがしばしばあつた。しかも、たとえ遺体を墓に埋葬した場合で

あっても、死者の出た場所ではそういう〔死者の住んでいた〕土小屋を忌み、その小屋に接した場所に立ち入ることさえ恐れた。そんなわけで、トンツィの堅穴の傍に何世紀かにわたって建てたのであろうアイヌの住居の跡が見られることは稀でない。

トンツィのことについて詳しく尋ねようとする、私はたいていの場合、答をはぐらかすような、または誰でも知っているような内容でも拒んで話さないような、ひどいときはあからさまな嘘をつくような態度で応酬されることになった。例えば、他の質問に対しては口数の多い老人であっても私には、トンツィについて両親から聞いたことと言えば「トンツィについて何も知らない」ということだ、とか、トンツィはアイヌに似たようなものだったが、どういうわけか姿を消した、どこへ隠れたものか誰も知らない、とか、トンツィは石の斧を使い、土小屋に住んでいたが、アイヌを恐れてどこかへ逃げ去った、あるいは、トンツィは自分の土小屋から姿を見せてアイヌの方を見ていたが、アイヌが近づこうものなら、トンツィはたちまち姿を消しても見つからなかった、などと言うのだった。そしてとうとう、私は二三の老人から短く、しかしこの件についてこれ以上話したくない、という拒絶の感情を表しながら、「トンツィ」などというものはなかった、サハリンにはいつの時代もアイヌだけが住んでいたのだ、アイヌはここで生まれた〔のであり移住してきたのではない〕のだ、と返答されることになった。

その後、ようやく 1904 年の 4 月になって、アイヌの間で 2 年間過ごした結果この種族との間に良好で友好的な関係を結べるようになり、親しい友人の一人で色々世話をしてやったことのある若いタイカ出身のアイヌが、自分の同族が「トンツィ」について口をつぐむ理由をあからさまに私に説明した。トンツィは本当にアイヌより古くからサハリンに住んでいたのだが、アイヌはこのことを意図的に隠している。もしロシア人がアイヌはよそから移住してきたことを知ったら、アイヌからすっかり土地を取り上げて島から追い出すのではないかと恐れているのがその理由だ。そのため老人たちは、誰であろうがトンツィについて、またアイヌにとってサハリンは故郷というわけでなく、自分たちが北海道から来たのだということについて話すのを、頑として許そうとしないのだ。

これと同じことを私は間もなく、ギリヤークやオラクも含めて東海岸の住民全てからその誠実さを尊敬されている、ナイエロ村^{校注4)}出身の高齢の老人からも改めて聞かされることになった。彼は自分が以前私を欺いていたことを認め、私がアイヌに対して善良で誠意ある姿勢の者であることを確信したので、自分たちの種族に害をなすような利用のしかたをすることを心配せずに私に本当のことを話す、と言った。

私はこの禁忌の始まりについて詳しく教えてもらったことはないが、その意味するところは全く明白であり、ロシア人たちがはじめて島のあちこちに姿を見せるようになった時代以来のことと考える。ニエヴィリスコイとその同志は、最近やってきたにすぎない日本人にはサハリンに対する権利がないことを証明したいと考えていた。この島にはずっと早くから「ロシア臣民」たるオラクスないしオラチェン（つまりオラク）が来て住んでおり、新しい征服者たちは彼らのことをロシア領のウダー川地域からやってきたツングースであると誤認していた。この「サハリン島領有に関する反駁の余地なきロシアの権利」^{原注1)}という政治的な目的は上記の子供っぽい民族誌上のフィクション^{原注2)}にも表れているが、確かに粘り強く追及され、各地の海岸や居住場所、既存の住民台帳の調査に際して執拗かつ徹底した聞き取りの行われる原因となり、さらぬだに〔ロシア人という〕新たな民族の登場に不安を抱いていた現地の住民に強い恐怖をまき起こしたに違いない。蓋し、より開明の度の高い日本人も、まだしっかりと定着できたわけでない場所からロシア人が自分たちを追い払いたがっており、それまでに日本人の占有していた拠点を獲得しようと熱に浮かされたように当時東海岸の北部に、また特に西海岸に殺到していることをはっきり認識し、不安を感じていたのである。

1854 年から 1875 年までの南サハリンにおける二重支配の（日本とロシアの）時代、アイヌの間に危機感がつづのり、外交上の用心深さも発達を遂げた。その後、ロシア人のみが島を確保し、日本人は馴染んだ場所を離れて退去することになると、分別の幼い原始種族は自分たちの存立について一層不安を深め、父祖の土地を失うことを懸念するようになった。また日本人も悔しさのあまり、言葉を尽くして新しい支配者と、彼らが獲得した領土

に持ち込む統制の恐ろしさをアイヌに説いたのである。

であるから 800 人以上のアイヌが日本人とともに島を去ったのも故なしとしないが、その日本人もアイヌへの態度においてロシア人と違いはなく、大して温厚でも、別段配慮に富んだわけのものでもなかった。

長老たちがトンツィについて話すことを禁じているという秘密を私に明かしたそのアイヌの友人は、またナイェロ村のアイヌたちが数年前に同じような質問をするあるアメリカ人の旅行者^{原註3)}を騙したときのことを話してくれた。この旅行者はサハリンの北部からアイヌたちのいる地方へやってきていろいろなことを細かく尋ね、中にトンツィについても質問した。シシラトカという名前のこの若いアイヌは、その会話の通訳をしたのである。旅行者がトンツィについて探り出そうとし始めると、老人たちは動揺を見せ、シシラトカに本当のことを言わないよう命じた。この研究者が何を書き留めているのか知らないが、アイヌ語をしゃべれない以上、目の前でわざと自分を欺く申し合わせがなされたとはわかるまい、と俺は思ったのさ、と彼は言った。

私はトンツィに関する言い伝えをいくつか、多少の異伝も含めて記録することができたが、それらの主要な特徴は似通ったもので、紹介すれば次のようなものである。

「アイヌがサハリンに来た時、そこで土小屋に住み、土の壺を作っている種族に出会った。この種族は自分たちのことを「トンツィ」と呼んでいた。彼らは背が高くはなかったが、とても低いというのでもなく、髪と目は黒く、外見上アイヌとさほど違わなかった。女たちは入墨していなかった。着ている上着は丈が短く獣皮が満州産の生地できていた。履物はアザラシの皮で作った（犬もトナカイも飼っていなかった、との異伝あり）。魚は釣針で釣り、網は使わなかった。テンを獲るにはくくり罠は使わず、仕掛け弓と落とし罠を仕掛けた。トンツィは今のギリヤークのものに似た船に乗って満州へ通い、そこから満州産の物資を運び込んでおり、その中に白く薄手の「バラ・ポウシ」つまり幅広の生地と呼ばれるもの（何かガーゼのようなもの）があった。アイヌは彼等から満州へ通う道を知った。トンツィはずる賢く、特にアイヌの女を好んで度々連れ去ったが、（北の方に限られたが）強姦したり殺したりすることも多かった。アイヌもこれを許すわけに行かず時としてトンツィと戦った。隣り合って住んでいる者たちは互いに客に招かれもしたが、その際トンツィは目の前に小刀を置き、一方アイヌは帯に下げた小刀を「通常は背後にあるのを」脇に回してちょうど膝の上に来るようにして、常に警戒していたのである。アイヌとの敵対と戦いの結果トンツィが退去することになり、彼らは舟に乗って島から出て行った。」北部の住民の信じるころではトンツィはチルピェニヤ岬（アイヌ語ではシレットコ）から船出して東へ向かったので、岬の近くにはトンツィの住居の跡が多数あるという。南部の住民はトンツィが姿を消した過程に関してこれほどはっきりした物言いはせず「山へ行ったか、海の向こうへ行ってしまったかわからないが、たゞいなくなったのだ」と言う。彼らの数は多く、今サハリンにいるアイヌよりも多かった。例えばトウナイチェイという土地の場合、言い伝えでは 120 人（「イワン・ホーツ」）のトンチが住んでおり、アイルポではさらに多くて 160 人いたという。何しろ多数の堅穴を残したことからトンツィのことを「シルクル・ウエンデ・カムイ」つまり「地面を壊してしまった者ども」とも呼んでいるのである。

今トンツィがアメリカ人と一緒にチュレニイ島に何度もオットセイ猟に来ており、狩りの季節に船で島へ行ったアイヌがトンツィを見たことがある、と自信をもって私に語ったアイヌが一人にとどまらない。よく知られているように近年、こうした目的で対価を払ってチュレニイ島とカマンドル諸島でオットセイ猟をしている会社があり、カマンドル諸島からはそこに住むアレウトたちを連れてきている。してみると、アレウトの外見は言い伝えにいうトンツィの姿をアイヌに思い起こさせるところがあったのである。

トンツィもまた最初にサハリンに住んだ人間ではなかった、という言い伝えを私は二度まで聞かされたことがある。彼らの前に何か、羽根の生えた「ラフ・コロ・アイヌ」という人々が住んでいた。ある古老は私に語って曰く「そのころは暖かくて、この羽の生えた者は家を作らず、衣服もいっさい着ていなかった。冬も厳しくなく、雪は降ったが人々はそれを気にすることもなく木々の下で暮らした。その周りは雪が融け、雪と木の幹との間が彼らの住みかになったのである。彼らは羽根で飛び回ってあらゆる獣を狩った。どんな動物も彼らの手から逃れることは出来なかった。海でも森でも、あまりに多くの動物を殺したので神は人々を罰することにし、羽根を切

り取ってしまった。その時以来、狩りは苦勞の多いものとなったが、一方獣は殺されることが少なくなり、それゆえ今日まで獣の種が続いているのである。」

同じ羽根のある人間について次のような言い伝えがある。「白鳥の群れがいくつも、羽根の生えた人々の頭の上を北へ、それからまた南へと飛び渡っていき、そのたびに「コーコーコ」と静かな鳴き声を上げた。それをうらやましく思った一人の人間が、白鳥たちに自分を一緒に連れて行ってくれるよう頼んでみた。なにしろ彼には羽根があるのに、ここで一つ所に留まっているのはつまらなかったからである。白鳥たちはそれを受け入れ、人間は飛び去った。それ以来、春も秋も白鳥の群れの中から、いっしょに飛んでいる人間の「コーコ」という低い声が聞こえる。」

サハリンのアイヌはルヴェ・キナ (*Petasites japonica*) [蔭] の大きな葉の下に住んでいた「コロボク・ウルク」のことを聞いたことはある。一枚の葉の下に6人づつ住んでいたというが、誰もが口を揃えて、この小人の種族が住んでいたのは北海道であり、サハリンではないと言う。

トンツィについては私は北海道の2か所でアイヌから話を聞いたことがある。室蘭から近いシラウオいの村で私は、自分がサハリンで見たような石の煙管はないか、と尋ねてみたことがあるが、サハリンには行ったことのないアイヌが、それは「トンゼン・カムイ・コロペ」つまりトンジという人々のものに違いないが、北海道にはこうした煙管はまったくない、と答えた。そしてサハリンのアイヌにも、こうした「シュマ・キシリ」(石の煙管)はトンツィの作ったもので、彼らの作ったものの中で唯一今アイヌが使っているものだ、と説明してくれた者がいる。

また別の機会にトンツィについて私に話してくれたのはピラトリ村の首長で多くの旅行者によく知られたペンリで、その内容は次のとおりだった。「トンジン・レプン・クル、シャンタ・コタヌン・グル」、つまりトンツィは海の向こうの、シャンタ(つまりオリチ-マンゲン)^{訳注3)}の住む土地に住んでいる民族である。北海道にはトンジが住んだことはないが、彼らの品物をアイヌが宗谷に運んできていた。ペンリは1870年代に沙流のアイヌの一団に加わって日本人の経営するサハリンの漁場に行き、ルレ村の首長の一人と、当時10円したという自分の日本刀と「トンジン」の刀を取り換えたことがあり、それをまたほかのアイヌとの間で取り換えたことがある。およそトンジンの刀は今北海道にはそうそうあるものではない、と。

この話から私が理解できたのは、これは満州から持ち込まれた刀のことを言っているのであり、そこに現れる「トンジン」という名称は、当初「トンツィ」がアイヌたちに満州の産物をもたらしていたことの名残にすぎない、ということである。

ここで、サハリンでトンツィの居住の跡のある場所の地名表を私にわかる範囲で掲載しておく。

A、西海岸沿い

- 1、もとのシラヌシ村のいくらか南(デブリラーダヴィチ^{校注6)}『南サハリンの民族誌概説』13ページ)。
- 2、シラヌシ村の北8ヴィルスタのところ(漁業家デンビー氏^{校注7)}の談話による)。
- 3、チェ川沿いの海産物漁場の上流側(そこで働いていた労働者たちが私に石斧を二つ持ってきたのを、アムール地方研究会のウラジオストク博物館に引き渡した)。
- 4、マウカ^{校注8)}の少し北にあるポロトマリ村付近(そこで見つかった石斧を私にくれた事業家シミョーナフ氏^{校注9)}の談話による。石斧はサンクトペテルブルグの科学アカデミー博物館に送付した)。
- 5、マウカから遠くないオコトマリの、海岸に接した場所(漁業家シミョーナフ氏の話によると、そこで石の鑿が見つかった)。
- 6、マウカ川沿いの大きな四辺形の土塁、漁場の少し上流(デンビー氏の話による)。
- 7、クスナイ付近の同様な土塁(デンビー氏談話)。
- 8、ドゥイカ川流域(パリコーフ『サハリンにおける調査の報告』)。

- 9、アリクサンドロフスク川流域（パリコーフ『サハリンにおける調査の報告』）。
- 10、ヴィアフトゥ村とポムル村の間の海岸砂丘。Л.Я.シュテルンベルグの発掘。『サハリン暦』1897年、177ページ。

B、アニワ湾

- 1、ススヤ川の河口に面したところ（パリコーフ、『サハリン調査の報告』）
- 2、チピサニ集落とその湖のあたり^{校注10}。（ここで囚人の働く製材所の建設を指揮していたラクス監守は多くの石器を集め、サハリンを訪れた博物学者 П.Ю.シュミットに引き渡した^{校注11}。）
- 3、カルサーカフ哨所。（石の楔が発見された。サハリン博物館目録、『サハリン暦』1897年、176ページ。）

C、東海岸沿い

- 1、アイルポ村（ススナイ）のあたり。（アイヌの談話による。）
- 2、トゥナイチャ村^{校注12}のあたり。（アイヌの談話による。）
- 3、ドゥブキー村^{校注13}（ススナイ）のあたり。（アイヌの談話による。）
- 4、シラロ村^{校注14}のあたり。堅穴の一つの近くで完全な形の焼き物の壺が見つかり、事業家のクラマリエンカ氏に届けられた。彼はその後それをサハリン博物館に寄贈した。私は何度かそこを掘ってみたことがあるが焼き物の破片を見つけただけで、それは科学アカデミーの博物館に送付した。
- 5、ナイブチ哨所の2 ヴィルスタ川下、白鳥湖畔。（ヂブリラーダヴィチ『南サハリンの民族誌概説』10ページ。）
- 6、マグンコタン付近（ラパーチン。シュリエンク『アムール地方の異民族ほか』142ページ）。
- 7、シルトゥル村のあたり。（アイヌの談話による。）
- 8、ニートウイ川沿いの河口から数ヴィルスタ上流。（アイヌの談話による。）
- 9、コタンケス川沿い、河口から4及び6 ヴィルスタ上流。（アイヌの談話による。）
- 10、コタンケシ村^{校注15}の南、海岸から3~4 ヴィルスタの複数の谷筋、ないしごく小さな川に沿った相当の区間にわたって。（アイヌの談話による。）
- 11、トマリケス村（ナイエロ村）のあたり。（アイヌの談話による。）
- 12、黒い川、アイヌ語でウツナイというパラナイ川の支流沿い。ここでかつて管区の長だったビェルイ^{校注16}と商人のラリオナフが石器と焼き物の壺を多数見つけた（ラリオナフの談話による）。
- 13、アイヌのタライカ村の背後とタライカ湖に沿った場所。（ラパーチン、パリコーフ。私はここで多量の土器片を集め、島を離れる前にナイエロ村のあるアイヌのところに置いてきた。）
- 14、チルピェニヤ岬の付近。
- 15、チルピェニヤ岬から北へオホーツク海（アイヌはカリエルと呼ぶ）に沿って。（アイヌの談話による。）
- 16、ヌイヴァ村のあたり、ヌイ湾。（ギリヤークの談話による。）
- 17、チャイヴァ村のあたり。（ギリヤークの談話による。）

D、島の内陸、トゥイミ川流域

- 1、ルイコフスカヤ村の背後、パリエヴァ村へ続く道路沿いの畑を耕作中に大きな石の鎌が掘り出された。農夫シェルムクシンの妻はそれを空から落ちてきたもので、幸せをもたらすと考えて取っておいた。
- 2、ルイコフスカヤ村からゼルビンスカヤ村へ向かう道路を4~5 ヴィルスタ北へ行ったところで道路開削中、石の鑿と小さな斧が掘り出された。ナイフを研ぐのに使おうと人夫の一人がそれを持ち帰ったがその後なくしてしまった。発見した場所へ案内してもらおうと森の中に開いた小さな畑で、毎年種を播いており掘り返すことはできなかったが、地表にはフリントの破片が多く見られた。
- 3、スラヴァ村のあたり、ロシア人の村から同じ名前のギリヤークの村へ続く道路沿い。住民がそこで石斧をみ

つけ、集落監督官のO.K.ビェザイス^{校注17)}に報告した。

4、ロシア人の集落アダ・トゥイムのあたりの丘の上。(ギリヤークの談話による。)

結論として私は、今日不明の点の多い「トンチ」の種族があるとき実際にサハリンに存在した、またそれをアイヌの種族と混同するわけにはいかない、という意見に信を置いてよいと考える者であるが、それ以上のことはあえて言い難い。

現在全く確かな事実と考えられているのは、かつてアイヌが日本の全域に住んだ時代があったこと、それから彼らは人口を増加させながら侵入してきた日本民族の圧力によりサハリンを含む日本の北方に押しつけられた、とうことである。北方へ退去する過程でアイヌが占拠するようになった土地がそれまで全く無人だったというのは、まずあり得べからざることである。また、まだ到来者の脅威にさらされる前のアイヌが、暑く産物豊富な日本の南部と寒冷で天候不順のサハリンという非常に性質の異なる領域をいちどに占有していたというのはそれ以上にありそうもない話である。それどころかアイヌ自身ははっきりと、サハリンへは彼らが以前から占有していた北海道から移住してきたと言っているばかりでなく、多くの材料によってまのあたり、アイヌは温暖な地域からこの気候の厳しい島へ比較的最近になってやってきたことが確かめられる。アイヌの言葉は母音に富むことでは日本語に劣らず、発音は明瞭で歯切れよく、その会話からは旋律と響きに満ちた音楽が聞こえてくるが、これは南方の、素早く印象をとらえまたそれを生き生きと表現しようと努め、何であれそれを妨げるようなものを遠ざける民族の言葉にのみ見られるものである。それから民族衣装の型式がある。襟と胸の開いた上着は、アイヌの遠い祖先がサハリンの寒さと冷たい風を知らなかったことを示している。ギリヤークの間に伝わる伝承として、初めてアイヌたちと接触した際、何よりその衣装にズボンがないことにギリヤークたちはたまげたといい、その後この衣料はギリヤークの南に住む顎髭を生やした種族の採用するところとなった、と私は聞かされたことがある。

しかしながら、アイヌが今日居住する北方の地域に移動した当時、まだ石器時代の民族が存在する段階を脱しておらず、人々はその後ようやく鉄の利用を知り、長らく親しんできた[石の]道具を捨て去った、ということもあり得る。これは全くあり得べからざることではない。がやはり、サハリンでこれほど多量に認められる半地下の小屋の跡、石器、素焼きの容器のかげらをなべてアイヌのものとするのは非常に困難である。何より、アイヌの間で土器製作の知識が失われた理由を説明しなければならないことになってしまう。実際シュリエンクは、ギリヤークは満州・中国の政府の統治のもとで文化上の隣人たちから陶器を受け入れた結果、それほど遠くない時代に土器製作を放棄してしまったものと推定している。しかしシュリエンクもまた、間宮倫宗が述べているような^{校注18)}このギリヤークの自製陶器に、サハリンで「トンチ」の堅穴の付近に見られる土器片と何ら共通するものがないことを認めている。このサハリンの土器片は、アムール地方の各地で出土するものと同じく、シュリエンクの意見では「はるかな古代のもので、あまりに古くて現代のものとは民族学上のいかなる関係もない」^{原注4)}のである。

サハリンではまだこうした遺跡のどこからも人間の遺骸が見つかったことはなく、現に住んでいるアイヌの骨格とそれを照合することはできない。とは言うものの、この議論は賛否いずれの立場であれ十分な説得力を持ったものにはならないだろう。例えば日本では、今はいない史前の種族が日本の全土に多くの石器時代文化の遺跡を残したことを認めるのか、それともそうした遺跡をアイヌの祖先のもののみとするのかという問題をめぐって学者たちは二つの陣営に分かれた。前者の立場を代表するのは坪井教授^{校注19)}、他の陣営を代表するのは解剖学の小金井教授であり、両者が提出した自説の証拠はいくつもあるが、中でも、前者は日本の石器時代人と現在のアイヌの骨格各部における違いを挙げ、他方は逆に両者の差が小さいこと、あるいは遠い古代以来経過した無慮何百年もの時間のあいだに骨格が変化した可能性を論じているのである。

日本列島のうち本州と北海道に見られる石器時代の遺跡を比較した結果、北海道では本州よりも遅くまで石器時代だったことがわかった。このことから坪井教授は、彼が石器時代遺跡の主人公であったと考える「コロ・ポ

ク・グル」は南から北へ移動したと結論している。あるいは、これまで縦横に往来したくてもできなかったサハリン南部がこのほど再び日本人のものとなったことで、今後日本の考古学者による研究が進展して、坪井教授が今日のエスキモーがそれにあたると考えているコロボク・グルが北海道からサハリンへ移り住み、さらにその後のはるか北に遠ざかることになったという仮説に与するような材料が得られるのかも知れない^{訳注4)}。

またもし「トンツィ」の石器、土器片及び堅穴を北海道の同様な遺跡と比較して、北海道の遺跡の主人公とトンツィの間に何らの共通点もないことがわかり、コロボク・グルのたどった道はサハリンを経由していないことが示されたならばまた別の、石器時代のサハリンとアムール地方の住民は一つと同じ種族に属していた、という推定がより確かなものとして残るであろう。

この推定は、アムール地方の事情に詳しくた **Ф.Ф.ブッセ**^{校注20)} がその論文「リエフ、ダウビへ及びウラへ川^{訳注5)} 流域の古代遺跡」^{原注5)} で初めて述べたものである。

彼自身がリエフ川沿いで見た土小屋や、ナダーラフ^{校注21)} がホル川^{訳注6)} 沿いで見たものをサハリンでのパリコーフやラパーチンの記載と比較しながらブッセは、サハリンの原始の住民はイレウ族^{訳注7)} と同じ一群の民族に属しており、ツングース族のソーシェン^{しよくしん} [肅慎] 人の一派であったと考えるようになっていた。彼はイアキンフ^{校注22)} の著作のうちの何か所かを根拠にこれら諸民族が満州とウスリー地方の土小屋を建築したと考えている。

イアキンフの著作に引用された中国の史家の僅かな発言から判断して「イレウ族は山と森に住んでおり、特に山地を好んで、堅穴に住み、武器としては弓矢を使い、その鏃は石鏃で毒が塗られていた。イレウの生業は狩猟と漁撈で、好戦的なことで知られ、近くに住む人々は陸路水路を問わず絶え間なく襲来する彼らに苦しめられていた。」

このソーシェンについてはまた、ソーシン（また別の日本語の読みかたではスクツィンとも）という名前です「ウジジネ・モノガタリ」^{訳注8)} という日本の最古の年代記の一つの中でも言及されている。

残念ながら今名称を明らかにできない、ある古い日本の書物に、私の知人の日本人が翻訳してくれたところでは次のように書かれている。「ソーシンは北海道各地の海岸に交易のため現われた。ソーシンは東タートル地方の各地を放浪し、イェゾにもやってきては交易を始めることを望んだが、彼らの風習はイェゾ（つまりアイヌ）のものとは全く異なっていた。」

アイヌについて私の知る限りでは、日本の古文書に彼らが石器を使っていたと書いたものはない。またアイヌ自身の間にもそうした言い伝えは残っていない。しかしながらアジアの東部では場所によって非常に遅くまで石器時代が続いた。例えばパラダイは中国の文献を根拠に、ウスリー地方と満州では石器時代が11世紀まで続いていた場所もあったと考えている。

今後アムール地方、サハリン及び日本の石器時代遺跡について確固とした比較研究が行われ、またアジアの東部に住む様々の種族の伝承が照合されて、一方の仮説が確認され、他方は論破されることになるだろうが、それまでは私は上述のブッセの立場に全く同意したい—つまりサハリンにおける「トンツィ」はここに述べたソーシェン人の一種族であった、ということである。

Б.ピルスツキイ

原注

- 1) ニェヴィリスコイの著書『ロシア人海軍士官の功績』1304 ページ。
- 2) ニェヴィリスコイの著書『ロシア人海軍士官の功績』、サンクトペテルブルグ、1878年。アイヌの熊祭りについて記載があり、アイヌの土小屋（「トイツェ」、つまりトイ・ツィセ）はオラクのものとして記されているが、彼らはトナカイの飼育を生業としてサハリンのツンドラのある地方にのみ、今も当時もテントを張って暮らしている。この本にはまたローツ・オラク・アイヌとかいうものについての証言が載っており、ロシア人とウドムルト地方のツングースとの交雑から生まれた人々がこの土地のアイヌ女性と婚姻したもので、そういう混血の人々がいろいろな村に純粹のアイヌに混じって住んでいたというのである。そ

の後誰もこうした現象を証明した人はいない。シュリエンク^{校注 5)} はこれを全く否定している。自分で聞き取りと観察を行った結果私は、こうした証言はニエヴィリスコイ自身か彼の依頼で当時サハリン沿岸を周航していた人物が作り上げた虚構であると確信した。

- 3) その時期から判断して、この旅行者はラウファー氏であったと思われる。
- 4) JI. シュリエンク 『アムール地方の異民族について』 2巻、141 ページ。
- 5) アムール地方研究会紀要 1巻、ウラジオストク、1888年。

校注

- 1) ラパーチン、インナケンチー・アリクサンドラヴィチ (1839~1909) は鉱山技師でサハリン島の天然資源の調査者。サハリン南部の石炭産地の産業上の意義を示した。
- 2) パリコフ、イヴァーン・シミョーナヴィチ (1845~1887) は博物学者、旅行者。1881年から82年にA.M.ニコリスキイとともにロシア地理学協会の委嘱によりサハリン島への調査旅行を計画し、島の地理学及び自然・歴史学的研究を行った。И.С.パリコフの調査旅行はサハリンの自然の研究に重要な貢献をもたらした。その人類学的・民族誌学的調査は多くの点でアカデミー会員 JI.И.シュリエンクの先行業績を補足するものとなった。
- 3) タライカ湖は現在のバラナイスク地区にあるニエフスカヤ湖。
- 4) ナイエロ村は1947年以降のバラナイスク地区の労働者町^{訳注9)} ガスチェッロである。
- 5) シュリエンク、リオポリド・イヴァーナヴィチ (1826~1894) はロシアの民族誌学者、自然誌家、ペテルブルグのアカデミー会員 (1863年)。ペテルブルグの人類学民族誌学博物館長 (1879~1894)。1854年から56年にアムール及びサハリンへの調査旅行団長を務め、これらの地方の先住民を研究した。この調査旅行の成果は基礎的な業績である『アムール地方の異民族について』(1~3巻、1883~1903年)に納められている。「古アジア」諸族(もともと古くから北東アジアに居住した人々)という学術用語を導入した。
- 6) デ・プリラーダヴィチ (デブリラーダヴィチ)、フォードル・ミハイラヴィチ (1839~1884) は陸軍大佐、1867年から73年までサハリン駐屯部隊長。「南サハリンの民族誌学的概観」(『シベリア及びその境域に接する地域の歴史的・統計的情報集』サンクトペテルブルグ、1875年、2巻1号1~67ページ)の著者。
- 7) デンビー、A.Γ.はスコットランド人で、ロシア国籍を取得し、商人 Я.И.シミョーナフのサハリンにおける事業の支配人を務め、のち自らの会社を経営した。
- 8) マウカは現在のホルムスク市。
- 9) シミョーナフ、ヤーコフ・ラザリエヴィチ (1831~1913) は商人、19世紀の70年代に自ら「シミョーナフ・デンビー商会」を設立しサハリンの西海岸で昆布の採取事業に成功した。商会の主な事務所はマウカ村にあった。80年代以降は魚が商会で扱う主な産物となった。1896年、ニジュニイ・ノヴゴロドの展覧会で「シミョーナフ・デンビー商会」の産物に金メダルが与えられた。
- 10) チピサニ村は現在のカルサーカフ地区の都市型町^{訳注8)} アジョールスキイである。
- 11) シュミット、ピョートル・ユーレイヴィチ (1872~1949) はソヴィエトの動物学者、教授で1930年から49年までソ連科学アカデミー太平洋委員会の学術書記であった。1900年から太平洋の魚類相の研究を行った。この分野で多くの著作を残している。サハリン南部の水産業に関する最初の包括的な著作である『サハリン島の水産業』(サンクトペテルブルグ、1905年)は彼の業績である。
- 12) トゥナイチ村は現在のカルサーカフ地区アホーツカヤ村である。
- 13) ドゥブキー村は現在のドーリンスク地区のスタラドゥブスカヤ村である。
- 14) シララカ村は現在のドーリンスク地区の都市型町^{訳注8)} ヴズモーリエである。
- 15) コタンケス村はニートゥイ川の河口にある古くからのアイヌの村である。現在のマカーラフ地区ノーヴァヤ村。
- 16) ビェルイ、イッパリート・イヴァーナヴィチ (1855~1903) は1884年から93年までカルサーカフ管区の長官であった。
- 17) ビェザイス、エドゥアルト・カルラヴィチは農学者、植物地理学者。サハリンで10年にわたり仕事を続けた。1899年にト

ウイモフスク管区の2地区の集落の監督官。1908年から9年までB.П.カマーラフの指揮するカムチャツカ調査団に加わる。1911年からアムール州主任農学者。

- 18) 間宮林蔵(1780~1844)は日本の旅行家で、1808年から9年にかけてサハリンとアムール下流域に滞在した。日本の歴史叙述ではタタール海峡の発見者とされている。
- 19) 坪井正五郎は東京大学の人類学教授、東京人類学会長。
- 20) ブッセ、フョードル・フョードラヴィチ(1838~1896)は著名な極東研究家、考古学者、統計学者、書誌学者。10年にわたりウラジオストクの移民管理局の主任を務めた。アムール地方研究会設立発起人。極東の歴史に関する多くの学術的著作を残した。
- 21) ナダーラフ、イヴァーン・イヴァーナヴィチは参謀本部所属の陸軍中佐、19世紀の80年代にウスリー地方における調査旅行を幾度か実施した。アムール地方研究会の中心的な活動者の一人。И.И.ナダーラフはウスリー地方の研究成果について公表した著作の中で先住民に対して大いに注意を払っている。
- 22) ビチューリン、ニキータ・イコブレヴィチ(修道士としてはイアキンフ、1777~1853)はロシア人中国研究家。1807年から14年間にわたり北京の宣教師長であった。1828年から51年にかけて中国の歴史、文化及び哲学に関する多量の学術的著作を公表した。

訳注

- 1) キヌイシ *кинись* は悪魔、悪霊などの意味でニヴフ語大陸方言の語彙(シルギエイ・ガルブノフ氏の教示)。
- 2) この島名は露文版ではリェル *Лер*、独文版ではトゥ *Tu* となっていて一致しない。やはりガルブノフ氏の教示によると *Лер* はアムール川河口に対峙するサハリン島北西部の、バギス川河口からタムラヴォ岬までの沿岸を呼ぶ言葉でありサハリン全島を指すものではない(Горбунов 1999の163~164)。一方ニヴフ語 *tu* は「これ」、*tu-mif* は「この島」の意味でサハリンを指す(高橋 1942の217)。この言葉を大陸側の住民がサハリンを指して使うのはおかしいように思われるが、ピウスツキが独訳に際してあえて語彙を差し替えた理由は不明である。
高橋盛孝 1942『樺太ギリヤク語』朝日新聞社
Горбунов, С.В. 1999. Б.О.Пилсудский и археология Тымовской долины. Известия Института наследия Бронислава Пилсудского. №3, Южно-Сахалинск, С.163-174.
- 3) オリチ-マングン *ольчи-мангуны* は今日ロシアでウリチ *ульчи* と呼ばれる民族に相当するアムール川下流域の住民(佐々木 1996の26~27など)。近世の日本の文献に「山丹」として登場し、樺太まで渡来してアイヌとの間で交易を行う民族として知られた。
佐々木史郎 1996『北方から来た交易民 絹と毛皮とサンタン人』NHK ブックス 772 日本放送出版協会
- 4) この段落の後半を、鳥居龍蔵は「恐らくは是等の遺物は、トンチの遺物研究を能く遣つて居る日本の考古学者には、其の子孫は現今のエスキモーであると云ふ坪井氏のコロポク、グル族は北海道から樺太に向け、樺太から更に又北方へ移転したと云ふ假説に対する有力な材料であらう。」(Pilsudski 1911の230~231)と訳しており、著者が坪井説をそれなりに評価している、との印象を与えるものになっている。しかし、同じ独文から和田完が訳した内容(ピウスツキ 1999の197)と比較しても、ピウスツキは「日本人が今後その立証に成功したなら」と条件付きで冷静に紹介しているのが実際であり、またそうでないと次の段落へと文脈が続かない(このため、鳥居訳の次の段落は理解の困難な文章になっている)。
かつて鳥居は「是等の事実から推考せば、より唐太アイヌがトンチの穴であると傳へて居つても、余はアイヌの遺したものであると考へます」(1904の380)として、アイヌが樺太で先住の異種族と接触した可能性を正面から否定していたのであるが、その後明治末年までに彼が坪井説と対立することを意図的に避けるようになっていたことに注意する必要がある。
鳥居龍蔵 1904「唐太島の内耳土器」『東京人類学会雑誌』220号 378~381
ピウスツキ(和田 完訳) 1999「サハリンの原住民」和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭 ピウスツキの論文を中心に』Academic Series NEW ASIA 31 第一書房 179~203
B. Pilsudski(鳥居龍蔵訳) 1911「樺太島に於ける先住民(下)」『人類学雑誌』第27巻第4号 227~232

- 5) リェフ *Лефу*、ダウビヘ *Даубихэ*、ウラヘ *Улахэ* はいずれも沿海地方南部内陸のウスリー水系の川で、シホテアリニ山脈に水源を持ち北に流れる。リェフ川は現在イリスタヤ *Илистая* 川と呼ばれハンカ湖に注ぐ。ダウビヘ川はウスリー川上流左岸に注ぐ現在のアルシェニフカ *Арсеньевка* 川の下流部、この合流点から上流のウスリー本流がウラヘ川である。いずれも 1972 年の改称以前の名称。
- 6) ホル *Хор* 川はハバロフスク地方の南部を流れるウスリー川の支流。シホテアリニ山脈の西斜面を水源としてハバロフスクから 80km ほど上流でウスリー川右岸に合流する。
- 7) このあとにイアキンフの著作からの引用として示される内容から言えば「イレウ」は魏書や晋書に言う「挹婁^{ゆうろう}」であり、それはツングース語族の言語を持ち、唐代の「靺鞨」に連なる集団と考えられている（大貫 2009 など）。なお、元史世祖本紀二に「吉里迷内附、言其国東有骨嵬亦里于两部、歳来侵疆」とあって 13 世紀に二ヴフの「東」に「骨嵬^{クイ}」（アイヌ）と「亦里于^{イリウ}」がいたことが知られる。この時期までサハリンに挹婁との系統関係をうかがわせる集団がいた可能性を示すもののように考えられるが、「亦里于」もまたアイヌ系の集団とする意見もある（中村 2006 など）。
- 大貫静夫 2009 「挹婁の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 151 集、同博物館 129-169
- 中村和之 2006 「金・元・明朝の北東アジア政策と日本列島」天野哲也・白杵勲・菊池俊彦編『北方世界の交流と変容—中世の北東アジアと日本列島』山川出版社 100-121
- 8) ウジジネ・モノガタリ *Удзинэ моногатали* は鳥居訳・和田訳とも『宇治拾遺物語』とし、和田（ピウスツキ 1999 の 203）は注して『『宇治拾遺物語』の「頼時が胡人見たる事」の一節を指すものと思う。』とする。しかし宇治拾遺物語の該当段に登場するのは文字通り「胡人」「胡国」で、肅慎は出てこないうえ、中世の説話集を「最古の年代記」と表現するか、という疑問がある。
- ピウスツキが次の段落に引く「残念ながら今名称を明らかにできない、ある古い日本の書物」は独文版では「日本の研究家岡本柳之助氏の『北海道史と日露の外交的關係』と云ふ書」（Pilsudski 1911 の 241）に変わっている。正しくは『日魯交渉北海道史稿』と題するこの著作の「肅慎」の項の冒頭には「肅慎一ニ靺鞨ト云フ、宇治拾遺物語ニ曰、肅慎ハ即チまかちニシテ、まかちハ即チ渤海ナリト」（岡本 1898 の 23）とあって、確かに宇治拾遺に肅慎が出てくるように読めるのだが、「肅慎ハ即チ」の一文はどうやら近藤重蔵の『辺要分界図考』巻之二の「肅慎ハ即チ靺鞨靺鞨ハ即チ渤海也」（近藤 1905 の 17）の引用らしく、また近藤はその直前に「宇治拾遺に出てくる胡国は肅慎靺鞨の土地のことと思われる」という意味のことを述べている。恐らく近藤の著作から岡本が「宇治拾遺 肅慎即チ靺鞨、靺鞨ハ即チ渤海ナリ」のように抜書きしておいたものを『史稿』の原稿に移す際に錯誤が起きたものと思われる。岡本の文章ではこのあと多賀城碑文、書紀や続紀からの引用が続くので、その翻訳を見たピウスツキが最初に出てくる宇治拾遺を最古の文献と誤解したのであろう、と想像される。なお、「ウジジネ」は恐らく、ピウスツキのために翻訳を作った日本人が「宇治拾遺」を「ウヂジニ」と漢音で読んでいたことを物語るであろう。
- 岡本柳之助 1898 『日魯交渉北海道史稿』風月書店
- 近藤守重 1905 「辺要分界図考巻之二」国書刊行会編『近藤正斎全集』第一 同会
- 9) 都市型町 *посёлок городского типа* はロシアの地方自治上の区画で、農村部にあるが非農業人口が多い集落。日本の町村の中の市街地などに近いものである。労働者町 *рабочий посёлок* はその類型の一つで、別荘町 *дачный посёлок*・保養地町 *курортный посёлок* に対するもの（稲子 1992 の 313 など）。
- 稲子恒夫 1992 『政治法律ロシア語辞典』ナウカ